

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04342

研究課題名(和文) グローバル人材育成における国際共修：教授法の確立に向けて

研究課題名(英文) Pedagogy for intercultural co-learning: toward the development of global human resources

研究代表者

末松 和子 (Suematsu, Kazuko)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：20374887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本の大学における国際共修のカリキュラム開発および教授法の確立に向け、先行研究による理論整理、国内外の国際共修における実施状況調査、グッドプラクティス事例研究、教育実践の検証を様々な研究アプローチを用いて重層的に行い、国際共修の意義と教育効果に対する考察を深め、国際共修カリキュラムおよび教授法の確立に向けて研究進捗を含む成果を継続的に国内外に発信することで国際共修の研究・教育両面の発展に寄与した。多彩なバックグラウンドを持つ研究者・教育実践者が協働し、国際共修の教育的価値を追求する中で、実践に役立つ国際共修事例集の発行や教本の出版等の大きな成果を得ることが出来た。

研究成果の概要(英文)：This project has significantly contributed to the development of both education and research in intercultural co-learning by carrying out a multi-layered investigation and disseminating updated research results both domestically and internationally. A research team consisting of researchers and practitioners from various backgrounds conducted an extensive literature review and case studies both overseas and in Japan, which resulted in a booklet of intercultural co-learning practices of over 30 cases at Japanese universities as well as a textbook targeted for practitioners in Japanese higher education. The research project hosted various symposium, seminars and workshops that promoted active dialogues among researchers and practitioners of intercultural co-learning in Australia, Europe, USA, and Japan.

研究分野：異文化間教育

キーワード：国際共修 異文化間教育 多文化クラス 国際教育 教授法

### 1. 研究開始当初の背景

加速的にグローバル化の進む国際社会において指導的人材として活躍する、いわゆる高度専門グローバル人材育成を目指した教育改革に取り組む高等教育機関が増えつつある。グローバル人材に求められる資質や能力が、従来の語学の熟達から、傾聴力、情報発信力、交渉力を含むコミュニケーション能力や多様性の受容、論理的思考力、問題解決力、行動力などの幅広い側面とらえられるようになり、これらの能力を育む教育機会を大学はこれまで以上に積極的に提供しなれなければならない状況にあった。

本来であれば、留学や海外インターンシップ等を通して学生は自ずとグローバル人材としての資質・能力を身に着ける機会に恵まれるが、経済的困難、卒業期の遅れ、カリキュラムの問題等の諸事情により留学に一步を踏み出せない学生、語学や異国での生活に対する不安から留学を躊躇する学生は未だ多い。海外留学の代替経験や、留学啓発および準備教育をカリキュラムに取り入れ、大学教育のグローバル化を図ることがグローバル人材育成の第一歩であることは明白である。

このグローバル人材育成の一環として、留学生と日本人学生の共修が注目されている。共修とは、単に留学生と日本人が机を並べ同じ科目を履修することではなく、意図的な教育介入により、言語・文化背景の異なる学生同士が他者を理解し、己を見直し、新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習体験である。日本人学生と留学生の共修の効果は、異文化間教育の研究者や実践者の間ですでに十数年前から指摘されている。学生間の異文化間交流の促進を目的に行った教育的介入は、学生の視野の広がりや自己成長への認識を促進すると同時に肯定的な態度変容につながり(加賀美、1999)、また、学習者の協働性、多様性尊重などの多文化理解態度要因に肯定的な影響を与える(加賀美、2006)。多文化クラスで行う協働作業は、学生のコミュニケーション力やチームワークへの意識を向上させ(徳井、1999)特に課題解決型の異文化間協働プロジェクトの企画、遂行は日本人学生の異文化のみならず自文化理解の促進につながる(末松・阿路娜、2008)。留学生にとっても、日本人学生に理解してもらえよう工夫し伝える作業は、日本的なコミュニケーションスタイル、価値体系また行動様式等のいわゆる文化の理解のみならず、文化と表裏一体の関係にある言語の習得につながる(中野、2006)ことが期待される。このように、さまざまな言語・文化背景の学生を適切な教育介入をもって有機的に結び付けることで、学生らが自分にとって馴染みのない「異」にぶつかり、葛藤し、最終的には理解・受容という過程を経て、自文化との相違点や共通点を探り

ながら己を見つめ直す機会づくりが可能となる。国際共修は、日本人学生、留学生の双方にとって有益な教育要素を含む一石二鳥教育として発展が期待されていた。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本の大学における国際共修のカリキュラム開発および教授法の確立に向け、先行研究による理論整理、国内外の国際共修における実施状況の把握、グッドプラクティスの収集、教育実践の検証を様々な研究アプローチを用いて重層的に行い、国際共修の意義と教育効果に対する考察を深め、研究進捗を含む成果を継続的に国内外に発信することでグローバル人材育成における国際共修の研究・教育両面の発展に寄与することを目的とした。異文化間教育、国際教育、日本語教育、グローバル・シティズン教育、教育評価を専門とする研究者で国際共修授業の実践者が協働し、それぞれの知見や経験に基づき、文献調査、アンケート及びヒアリング調査、フィールドワーク、教育評価検証等の様々なデータ収集ツールを教育実践に取り入れたアクションリサーチを中心に、国際共修の教育的価値を追求する。

### 3. 研究の方法

国際共修の先行研究による理論の整理および日本国内の高等教育機関における国際共修実践状況調査、国内外の国際共修グッドプラクティス事例研究を中心とする「基礎研究」、国際共修の教育効果を最大化するための体系的なカリキュラム開発と大学教育全体における国際共修カリキュラムの位置づけ、また国際共修の教授法に関する研究を中心とした「実践研究」を以下のように実施する。

#### 1) 平成27年度: 基礎研究

国際共修実践状況調査: 国内における国際共修実践例に限られることが予想されるため全大学ではなくグローバル人材育成の取組が顕著な大学を選抜し調査を実施した。本研究チームで開発する国際共修実践状況調査票を対象校に送付し国際共修の実施の有無、開講科目数、開講形態、授業概要、教授言語、学生の構成等の基礎情報に加え、学習目標、これまでの成果、課題等が把握できるよう対面もしくは記述式とする。データ整理・分析を実施し共修授業を開講形態、概要等の情報をもとにパターン化し、グッドプラクティス事例研究対象選択の際の参考とした。同時に分析結果を国際学会、セミナー、研究会等でも報告する。

グッドプラクティス事例研究: 上記の調査結果に加え、文献研究にて明らかにする国内外のグッドプラクティス実践例を選抜しヒアリング調査を実施した。国際共修に関連した研究・教育に携わる専門家を対象に半構造化インタビューに加え、授業の成果、課題

等が複眼的に検証できるように教育実践者以外のステークホルダー(学生、TA、学内外の授業協力者等)も調査対象とする。収集したデータは、テーマ設定、教材、クラス管理(指導言語、教育介入、規律、倫理等)課題、評価の各カテゴリーにおいて項目別に整理・分析する。

#### 2)平成28年度:実践研究

カリキュラム開発、教授法開発:基礎研究の成果を教育実践に応用しその成果と実践前の成果を比較するアクションリサーチを実施する。アクションリサーチでは学生の授業評価、異文化コンピテンシーもしくは同等の学習成果指標、フィードバック等を調査対象とし各授業担当者が研究主体となりグッドプラクティス応用における授業改善成果を検証する。同時に上記の5つのカテゴリーを中心に担当者が教授法の開発を主導する。定期的に情報共有、議論、ディブリーフィングを実施し教授法の開発に臨むと共に国際共修カリキュラムの開発研究も進める。

#### 3)平成29年度:研究成果のまとめ・検証・成果発信

2年間にわたる研究の成果を「国際共修授業実践ガイドライン」にまとめる。この際、大学の規模、運営形態(国・公・私立)教育理念、学生および教員構成員等が異なっても参考となるように汎用性に留意する。国内外の研究者・教育実践者らとも共同研究・発表の機会を探求しながら幅広い視点でフィードバックが得られるよう議論を行い更なるガイドラインの改善に反映しながら共修ペダゴジーの開発にあたる。最終的にはガイドラインを国際共修教本として出版し、国際共修実践の普及に貢献するとともに、日本版多文化教育の研究促進に資する成果発表を行う。

### 4. 研究成果

本研究では、異文化間教育、国際教育、日本語教育、グローバル・シティズン教育、教育評価を専門とする国際共修授業の実践者が協働し、それぞれの知見や経験に基づき、文献調査、アンケート及びヒアリング調査、フィールドワーク、教育評価 検証等の様々なデータ収集ツールを教育実践に取り入れたアクションリサーチを中心に、国際共修の教育的価値を追求しつつ、シンポジウムやワークショップの開催を通して海外の研究者とも研究ネットワークを確立することが出来た。3年間に渡る国際共修カリキュラムおよび教授法の確立に向けた継続的な成果発信により国際共修の研究・教育両面の発展に大きく寄与することが出来た。

#### 1)平成27年度

##### 概要

国際共修のカリキュラム開発、教授法の確立に向け、理論整理およびグッドプラクティス事例研究を実施した。教育実践の検証を様々

な研究アプローチを用いて重層的に行い、国際共修の意義と教育効果に対する考察を深め、カリキュラムおよび教授法の確立に向けて研究進捗を含む成果を継続的に国内外に発信した。実践者がそれぞれの知見や経験に基づき国際共修の意義や価値を検証し、グローバル人材育成のみならず、教育の国際化施策および政策提言につなげる実践への応用を主眼に据えた研究を以下のように実施した。

まず、国内の国際共修におけるグッドプラクティス事例研究である。国内11大学37の国際共修事例研究調査を実施、授業実践者を対象とした半構造化インタビューをもとに、テーマ設定、教材、クラスルーム・マネジメント(指導言語、教育介入、規律、倫理等)、課題、評価方法、直面した課題と解決策についてデータ収集し、項目別に整理し分析した。国内の国際共修の実践状況のある程度、把握することが出来た。さらに、理論構築や海外の共修実践例をテーマとした研究会を開催した。

##### 具体的成果

「留学生と日本人学生が共に学ぶ国際共修:理論と実践」は、メルボルン高等教育研究所副研究所長、リチャード・ジェームス教授を招き研究会を実施したファカルティレッド・デベロップメント・セミナーである。また、「留学生と日本人学生が共に学ぶ国際共修:ペダゴジーの確立に向けて」のテーマで、同研究所のソフィー・アーコーデイス教授を招聘し、国際共修における理論構築、オーストラリアでの教育実践例に学ぶとともに同氏の提唱する「Finding Common Grounds」の日本の教育現場への応用に関する議論、また、前述の国際共修の国内事例研究成果報告も合わせ実施した。

#### 2)平成28年度

##### 概要

カリキュラムの国際化を屋台骨とした国際共修授業の教授法開発を推進し以下の成果を生み出すことが出来た。まず、国内外のグッドプラクティス事例研究:調査を海外の好事例研究に発展させ、オーストラリアのメルボルン大学、ラトルブ大学にて、多文化クラスや教員向け研修、教材開発についてインタビューを実施した。国内では立命館大学、名古屋大学等で引き続き事例研究を進めた。次に、これまでの成果を振り返り最終年度の取組に反映させるシンポジウム「国際共修:留学生と国内学生の学びあいをデザインする」を2017年6月18日(日)に東北大学で開催するための準備を実施した。このシンポジウムでは、国際共修の効果検証・体系的考察、学習成果を最大化する教授法の開発等における課題の共有と、カリキュラムや授業設計、国際共修を含む「Internationalization at Home」の専門家を国内外から招聘し海外と日本の事例を通して大学教育における国際共修の

現状と課題、展望につき議論し学習効果を意識した国際共修のあり方を議論した。

また、本研究を進める中で国際共修授業の教授法に関心を持つ研究者のネットワークを構築できたのは大きな成果の一つと言える。これら研究者と教本出版に向け準備を開始した。構成は、国際共修の背景と理論、事例に学ぶ国際共修(海外)、事例に学ぶ国際共修(国内)、国際共修の「デザイン」と「教授法」である。また、東北大学にて「国際共修ゼミ」の開講クラスを拡充し2017年度に向けてさらに新規科目の開発準備にあたった。

#### 具体的成果

前年度に実施した事例研究を『国際共修事例集作成』にまとめた。様々な形態の国際共修事例を含む本事例集は、国内の教育実践者が、国際共修授業の開発や授業改善にあたる上で参考となるように、国際共修の課題やティーチングにおける留意点等につき詳しく述べる実践的・実践的な内容となっている。グッドプラクティスや課題の共有を図るだけでなく、大学を越えた国際共修実践者のネットワーク構築にも寄与出来た。

#### 3)平成29年度

##### 概要

高等教育機関におけるグローバル人材育成のみならず、教育の国際化施策および政策提言の基礎資料の整備を通じて、実践に役立つ研究プロジェクトを行うことに注力した。国内外で行った調査の結果およびそれをもとに作成した国際共修実践ガイドライン、また現在作成中の国際共修の教本を国内外の教育実践者および研究者に広く公開し、実践に役立つ知の貢献を行う研究プロジェクトを行うことが出来た。研究成果は国際共修研究プロジェクトおよび教育実践の参考資料としてまとめ、研究代表者が所属する東北大学高度教養教育・学生支援機構のホームページ上で公開している。また、本研究プロジェクトを通じて連携を深めた国内外の研究者と今後も引き続き活発な情報交換を行い研究ネットワークの維持・拡大に努めることが出来た。

##### 具体的成果

異文化間教育学会との共催で国際共修をテーマとした公開シンポジウムを実施した。これまで移民や留学生を戦略的に受け入れ、多文化社会を作りあげてきた欧米豪諸国、とりわけ多文化クラスにおけるペダゴジーを理論や効果検証を含む研究と連動させ推進してきた豪州や、キーコンピテンシー、21世紀型スキル、雇用されうる能力(Employability)などのジェネリックスキルに着目した教育改革を進展させる欧州から高等教育国際化の専門家を招聘し、国内における内なる国際化の先導者とともにシンポジウムに参加した研究者・教育実践者が活発な議論を展開することが出来た。本研究ではこれらの背景をもとに、日本の大学における国際共修のカリキュラム開

発および教授法の確立に向け、先行研究による理論整理、国内外の国際共修における実施状況調査、グッドプラクティス事例研究、教育実践の検証を様々な研究アプローチを用いて重層的に行い、国際共修の意義と教育効果に対する考察を深めることが出来た。また、国際共修カリキュラムおよび教授法の確立に向けて研究進捗を含む成果を研究会、シンポジウム、セミナーの開催や専門誌への投稿および国内外の学会等で継続的に発信することで、国際共修の研究・教育両面の発展に寄与出来た。具体的には、異文化間教育、国際教育、日本語教育、グローバル・シティズン教育、教育評価を専門とする国際共修授業の実践者が協働し、それぞれの知見や経験に基づき、文献調査、アンケート及びヒアリング調査、フィールドワーク、教育評価検証等の様々なデータ収集ツールを用い、包括的な調査を行うことで国際共修の教育的価値を追求することが出来た。

#### 4)まとめ

日本の国際共修はもともと「日本事情」等の日本語教育科目を国内学生に開放して始まった経緯もあり、欧米のようにカリキュラムの国際化を原点として発展したわけではない。つまり、対象となる学習者や学習到達目標はおろか、根本的な教育理念が共有されておらず、留学生と国内学生を一緒にして起こった化学反応に教育的意義を持たせた(末松、2017)と言っても過言ではない。機関、組織、プログラムの教育理念に適合した理論に基づき、全ての学生を対象としたカリキュラム構築につなげる必要がある。これらの教育実践の更なる推進に必要な基盤を本研究で確立できたことは大きな成果であるといえる。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

末松和子(2018)「カリキュラム国際化と国際共修：留学生と国内学生の学び合いをデザインする-第38回研究大会公開シンポジウムの報告を中心に-」、『異文化間教育』異文化間教育、47、68-84、査読無し

末松和子(2017)「内なる国際化」でグローバル人材を育てる-国際共修を通じたカリキュラムの国際化-」、『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』、東北大学高度教養教育・学生支援機構、3、41-52、査読有り

〔学会発表〕(計18件)

Kazuko Suematsu, Stephan Jungblut, Yukako Yonezawa (2018), "Can Short-Term Program Really Enhance Students' Employability?" APAIE (Asia Pacific Association for International Educators) Annual Conference

Meifen Chen, Kazuko Suematsu (2018),

“ Give Youth the Skills Needed for the Jobs of Tomorrow ” APAIE (Asia Pacific Association for International Educators) Annual Conference

北出慶子 (2018) 「学びについての評価から学びのための評価へ 外国語・日本語教育における評価と授業設計」、『神戸大学国際教育総合センター・コロッキアム』

尾中夏美、松岡洋子 (2017) 「協働作業を通じて学ぶ出身・所属・世代の多文化性」、『異文化間教育学会』

Keiko Kitade (2017), “ Impact of the local language on identity development among international students in an English-medium instruction program ”, International Society for Language Studies

末松和子 (2017) 「日本の大学における国際共修の取組とその展開：実践例と学習成果のアセスメント」、『異文化間教育学会第 38 回年次大会公開シンポジウム』

末松和子 (2017) 「限りある資源に向き合う：Win-Win-WinWin の留学生支援と国際共修」、『留学生教育学会第 22 回年次大会』

Kazuko Suematsu (2017)

“ Internationalization at Home: How can we globalize students’ learning experiences without sending them abroad? ”, Forum on Internationalization in Higher Education: Promoting Student Mobility, 2月16日

Natsumi Onaka (2017), Influences on Willingness to Communicate and Motivation to Study at English Camp, 全国英語教育学会、2016年08月20日

Natsumi Onaka (2017), English Language Immersion Camp to Motivate Study and Improve Language Skills, TESOL Indonesia International Conference, 8月11日

Keiko Kitade & Natsumi Onaka (2016), “ Inter-cultural Co-Learning in Japanese Higher Education: Case studies on implementation of co-learning in Japan, Intercultural Co-learning in Japanese Higher Education: Working towards the Development of Pedagogy ”, 3月11日

末松和子 (2015) 「課題解決型の国際共修が大学を変える：学生の学びと成果」、『留学生教育学会』8月29日

北出慶子 (2015) 「グローバル人材育成と共修」、『留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える 2015 理論と実践』2月27 - 28日

〔図書〕(計3件)

Keiko Kitade (2017) “ Do experiences of teaching abroad impact identity transfor-

mation in second-language teachers? ”, In Readings in Language Studies, International Society for Language Studies International Society for Language Studies, Inc. 23頁

末松和子 (2016) 「学生間の意味ある異文化間交流を丁寧に「仕掛ける」：東北大学における実践」、『坂本利子、堀江未来、米澤由香子(編著)、『多文化共修：多様な文化背景の学生の学び合いを支援する』、学文社、234頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://intl-class.ihe.tohoku.ac.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

末松 和子 (SUEMATSU, Kazuko)  
東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：20374887

### (2) 研究分担者

北出 慶子 (KITADE, Keiko)  
立命館大学文学部・教授

研究者番号：60368008

尾中 夏美 (ONAKA, Natsumi)

岩手大学・国際交流センター・准教授

研究者番号：50344627